

『和解』再論 : 妻 たちの物語

著者	池内 輝雄
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	31
ページ	141(102) -158(85)
発行年	1997-03-25
その他のタイトル	A Reconsideration of Shiga Naoya ' s “ Wakai ” : A Story of Wives
URL	http://hdl.handle.net/2241/13781

『和解』再論

——〈妻〉たちの物語——

池 内 輝 雄

1

これまで志賀直哉の文学について〈語り〉という観点から論じたものは、管見に入ったかぎりそう多くない。そうしたなかで、物語の語り手の〈私〉と、物語のなかに対象化された〈私〉とを仕分けることによって物語内容の解明を試みた論に、佐々木英昭氏や水洞幸夫氏らの仕事がある。これらはいずれも主として「大津順吉」を対象とした論である。言うまでもなく「大津順吉」は、語り手が数年前（少なくとも五年前）のことを語るといふ構造を持った作品であるが、多くの論者は、その対象化された数年前の〈私〉のほうに焦点を合わせて読み、さらにそこに作家の伝記的事実を重ね合わせることによって対象化された時期の作家実体を明らかにすることをやってきた。この点、佐々木氏は、「過去の自己」と現在の自己」との「距離」、それも「過去の自己を高めから見降ろすほどの距離は取れていない」心的状態を明らかにし、また水洞氏も、「回想される物語の時間の流れを寸断して、回想している現在の語り手が絶えず介入してきている」ことの指摘をとおして語り手の現在意識を解明し、それまでの志賀直哉文学の読まれ方に異議を唱えたのである。

率直に言って、いわゆる私小説において、語り手の〈私〉とその対象である〈私〉とを区別するのは、難しい作業のように思われる（佐々木氏がそうした困難な作業を行ったことは注目される）。ことに「和解」のように

語る自己と語られる自己との間に、時間的な隔たりはもとより心的隔たりもない（と想定される）場合には、両者の間の境界を見定めることはきわめて困難となる。たとえば、「自分は墓参りの為め我孫子から久し振りで上京した」（二）という「自分」は、言語レベル（言説）から見て明らかに過去の「自分」と見なし得るが、では、物語現在に立つ語り手・「自分」が、過去の「自分」を対象化すべきものとして明確に意識しているかといえ、どうもそのようには思えないところがある。むしろ「自分は」と発語したときの語り手は、過去の「自分」を現在の「自分」につづく連続体として無意識のうちに認めてしまっているように思われる。いわば語り手は、過去の「自分」と融合し、癒着してしまっているようなのである。

したがってと言うべきか、これまで「和解」は、「物語を生産する行為」³としての「語り」に注目した論考は少なく、主に語られたこと、「語り」の対象のほうに重点を置いた読まれかたがなされてきた。それは、論者の間に、語り手と語られた者とがイコールだという右のような暗黙の了解が成立していたからにちがいない。そのような了解は、語られたことをとらえることがそのまま「物語内容」をとらえることにつながるという、つぎのレベルの了解をも可能にする。

小稿の目的は、語り手の意識の構造をさぐり、語り手を含めた物語として「物語内容」をとらえることにある。とはいえ、その手がかりは、当然のことながら物語の言説以外になく、従来の方法とそれほどかけ離れたものではない。

2

「和解」の時間構成を物理的な時間の順序に即して整理しなおした須藤松雄氏の「略表」⁴があるが、その誤りを指摘した筆者の意見や、訂正・整備を行った山田有策氏の「時間表」⁶がある。これに対して「順吉の変貌を保障する重層化した時間の厚さや質量」を重視する関谷一郎氏の批判がある。関谷氏の見解は、言いかえれば語られた時間の順にしたがって読み進むことを示唆したものである。

関谷氏はその意味から冒頭の一節に注目し、山田氏の「予定調和のプログラム」説も受け入れながら、「すべてが終った地点から、即ち〈和解〉という収束地点を見据えながら」書き出されたとし、「主人公順吉がまず父の居る東京へ行くという動き」が「予定調和」としての〈和解〉に向けての初動であること、父との「不和」の象徴たる「最初の児」の死を再確認する墓参りから「和解」という作品が始まるということ」をあげる。この指摘は鋭い。また、冒頭の章全体を視野に入れれば、すでに竹盛天雄氏に、祖父母や母の墓前での心的状態、「肉親愛の交換」が「和解・調和への気運」を呼び出すという勝れた指摘もある。

これらの論を首肯しながらも、〈和解〉の物語を語ろうとする語り手が、なぜこの上京の場面から語り出さなければならなかったのかということについては疑問が残る。

此七月卅一日は昨年生れて五十六日目^①に死んだ最初の児の一周忌に当つて居た。自分は墓参りのため我孫子から久し振りで上京した。(傍点付加)

まず「此」という語が注目される。「此」はなくても意味は通じそうだが、なぜ付されたのか。「此」の一語は、後に回想する〈昨年の〉に對比した〈今年の〉もしくは〈最近の〉という意味であるが、それだけでなく、七月三十一日が語り手の現在に近接した時間であることを明示しているように思われる。

とはいえ、これにつづく八月十五日ごろまでの日々が特記されることなく粗述されること、また、八月二十三日が「今から四週間前」(十二)として語り手の「今」に最も近接した時間と想定されることなどを考えれば、この日が現在から過去からも突出していることが明らかである。言説の上から、この日が最初の児の一周忌という特別な日であることは言うまでもないが、単にそれだけではないようだ。

それとともに、山口直孝氏の指摘するように、「久し振りで上京した」も注目される。後には、彼(語り手の対象としての「自分」、以下〈彼〉と呼び、これに対して語り手としての「自分」が区別できる場合には、以下〈語り手・彼〉と呼ぶ)は、七月二十三日から「二三日して」(十)上京し、祖母や母や妹たちと誕生したばかりの児の名前について協議し、「留女子」と命名している。したがって前回の上京からこの日まで、わずか五、六日

しか問がない。すると、外の目的での上京は「久し振り」ではなかったけれど、「墓参」という目的での上京は「久し振り」であつた、ということになる。たしかに言説の上ではそのように読める。しかし、ここで彼および語り手・彼がそのような明確な意識に基づいていたか、にわかに断定できない。

問題は、上京した彼が、上野に着くとすぐに麻布の家に電話を掛けていることである。

彼が利用した電話は〈自働電話〉（公衆電話）であつたろう。ちなみに〈自働電話〉は一九〇〇年に新橋、上野の停車場前にはじめて設置されたが、その後劇場、公園、繁華街などに置かれるようになり、一二年末には六五四箇所¹⁰に及んだという。後を読めば、彼は実家にしばしば電話を掛けるが、その発信は東京にいるときだけに限られる。つまり、彼の住む我孫子では医者¹⁰の家にさえ電話はなく、緊急のさいの遠方への連絡手段は駅から打つ電報に限られ、それも受け付け時間に制限がある。わずかに「規則外」ではあるが、駅員の好意によって鉄道電話を使わせてもらうことができる程度である（十）。

したがって、彼にとって上野の電話こそ、電線を通じて実家と直接つながることができる、最も有力な手段であつた。「久し振り」と感じたのは、彼が実家と離れている（離されている）心的時間の長さを表したものと読みとれる。彼はそれほど実家に関する情報に飢えていたようだ。

ただ、注意しなければならないのは、その相手がほとんどの場合、母（義母）であることである。母は、彼を心的に実家と結びつける媒介者として存在するようである。そうした事情を冒頭部のつぎのところに見ることができる。

（…）電話をかけた。出て来た女中に母を呼び出して貰つた。

「お祖母さんは如何ですか」と云つた。

「お元気ですけど未だお出掛になるのは少し早いので、お墓へは今朝私が出て来ました」と母が答へた。

「さうですか。僕もこれから青山へ行く心算です」（傍点付加）

彼が電話した直接の動機は、祖母の安否を確かめることである。ただそのためだけならば、女中にたずねるこ

と（實際、八月二十三日には一度そうしている）もできたはずなのに、わざわざ母を呼び出してもらっている。なぜ母でなければならなかったのか。それは、後の会話で明らかになるように、父のその日のスケジュールを知るためという理由があった。だが、はたしてそれだけだったのだろうか。そこには、もう少し別な動機が働いてはいしないだろうか。

ともあれ、祖母の様子をたずねる彼に対して母は応答し、つづいて「お墓へは今朝私が出て来ました」と言う。それは、彼の亡くなった児に対する彼女の心づかいが表されたものと（読者には）理解できる。だが、読みの上の問題としては、「さうですか（…）」と応えるそのときの彼がそれを理解したかどうかを（読者が）確認できないことである。

これにつづく一節にも二人の緊張に充ちたやりとりがある。

二人は一瞬黙った。

「今日は青山だけですか？」と母が云った。

「友達の所へも寄る心算です」と答へた。

母は云ひにくさうに少し小声になつて、

「今日はお父さんお在宅なの……」と云った。

「さうですか。又其内に出て来ませう」

自分は出来るだけそれを見無心らしくいつたが、屈辱から来る不愉快な表情は電話口だけに露骨に自分の顔に現れるのを感じた。母は、

「康子や留女子も元気ですネ」と未だ産褥にゐる妻や九日前に生れた第二の児の事を訊いた。

「元氣にして居ます」

「お乳もよく出ますか？」

「よく出ます」そして自分は「それぢやあ……」と云った。

「あのね。若しお出かけになるかも知れないから、又後で掛けて見て下さい」と母が云つた。（傍点付加）長い引用だが、一行たりとも省くことができない。「二人は一寸黙つた」のはなぜか。二人はいま、あることを話題にしたいのだが、ためらっている。どちらが先に口火を切るか。じつは、彼が上野に着きしたいこの家に電話をかけたのは、青山墓地を経てこの家に向かうことを当然のように考えていたからである。母もまた、彼のこの気持ちを察している。したがって、ここでの沈黙は、〈行ってもかまわないか〉という彼の問いと、〈いま来られてはまずい〉という母の答えとが、どちらも言い出せないまま宙に浮いているのである。

しかし、いつまでも無言のままではいけない。母は「今日は青山だけですか？」と、彼の意図を遠回しに打診する。彼に来る予定がなければ、わざわざ夫の在宅の事実を告げて彼の気持ちを損ねることもない。「青山だけ」は、彼の青山の後の行動を確かめる婉曲の表現なのである。これに対して彼は、「友達の所へも寄る心算です」と答える。「へも寄る」というのは、〈その後で行きたい〉という、これも遠回しの言い方である。それを察知した母は、ついに二人の共通の問題、夫（父）の在宅の事実を明らかにする。それも「云ひにくさうに少し小声になつて」という調子で。ここには彼への配慮とともに、家の中で耳を澄ましているかもしれない夫に、彼との話を聞かせたくないという気持ちも働いていよう。だが、ここでも、はたして彼がそうした母の気持ちを理解したかどうかは、（読者は）確認できない。

父の在宅を告げられた彼は、相手の顔が見えない電話口だけに、余計不愉快な顔つきになる。すると、母はそれを敏感に感じとつたのである。すかさず、まだ産褥の床に就いている彼の妻や生まれたばかりの児のことをたずねる。不愉快になつた彼の気持ちを別の方向に転換させてやりたいという彼女のつつさの機転である。くりかえすが、ここでも彼が母の真意を悟つたかどうか。ともあれ、電話を切ろうとする彼に、母は、もう一度電話を掛けなおすようにと言う。彼の、家に立ち寄りたいという気持ちを斟酌し、その期待を先につないだのである。母の気づかいは、この箇所だけにとどまらない。

この後、彼は青山墓地で祖父と祖母の墓を訪れ、花立てが「その朝差した花でどれも一杯」なのを眼にし、亡

き児・慧子の墓のほうに回ると、「其処の花立にも花が一杯だつた」ことを知る。先刻の「お墓へは今朝私が出て来ました」という母の発言が言説以上に実行されているのを確認したのである。ただし、ここでも、彼の感想はわざとのように語られない。

彼は母の意向に沿わず、電話を掛けしないで実家に赴く。父がいるらしいので、さすがに玄関を避けて「仲の口」(傍点付加)から上がると、その廊下で母と出会う。母は「一寸驚いたやうだつたが、直ぐ何気なく普通の挨拶」をする。さつき電話で話したことなどおくびにも出さない。それだけでなく、これにつづく場面では、電話のときのような母との会話が少しも語られないことに注意すべきであろう。電話には受話器を通して人を一対一の関係で直接的に結びつける機能があることは言うまでもないが、彼はそれを利用して母との間に特別な関係、(内通通報者)、あるいは父の眼を盗む(共犯者)の関係を保持しようとしているようである。しかし、他者がいるところでは通常の関係に戻るのである。

この場面では、もうひとつ、彼の知りえないところで母がある動きをしていることを(読者は)読みとるべきである。それは、祖母の部屋で彼が祖母と話をしていると、「母や小さい妹などが出て来」、「女中が菓子や冷した飲物などを運んで来た」というところである。言うまでもなく、「小さい妹」や「女中」らが自らの意志で勝手にやって来たわけではない。別の部屋で母が彼を歓待するよう、彼らにひそかに言い含めたからにちがいない。長々と見てきたのは、母の彼に対する思いやり、やさしさといったことが、われわれ読者の読みによって浮かび上がるということを言うためである。そのさい、語りの対象としての彼の心的状態は、父との関係、さらにはその関係から派生する「屈辱から来る不愉快」といったことは明らかにされるが、一方、母(義母)に対してはたらく親和な感情はわざとのように隠されているのである。それは彼がそのことに気がついていないのか、あるいはわざと気がつかないふりをしているのか、いずれとも判別できない。

しかし、少なくとも語り手・彼にはそれが充分意識されている。なんとすれば、読者である私たちが、この母の心づかいを手取るように理解することができるからである。語り手・彼はそのようなかたちで、読者にメッ

セージを送っていると言える。

いずれにしても、語り手・彼がこのような母のイメージを、先に述べたように、〈現在からも過去からも突出した時間〉である冒頭部にもつてきたことに、やはり注目しておきたい。この母のイメージこそ、「和解」を読み解く鍵であると考ええる。

3

「和解」を〈和解〉への物語として読む場合、それがどこから始まり、どのような経過を経たかをたどることは当然なことながら重要であろう。よく引用される正宗白鳥の「父子の争鬭の根本が曖昧模糊の感じがする」という批判は有名だが、語り手・彼のなかには不和の原因を追求しようという意図はもともとなかったらしく、白鳥の批判は必ずしも当たっていない。「丁度十一年前」のこととして想起される「これからは如何な事があつても決して彼奴の爲めには涙は溢れない」という父の発言(三)が不和の端緒と言えはいるが、それよりも不和の状態からその解消へと進捗した経緯を語ることが、語り手・彼の本意のようである。

最初の〈和解〉への動きは、父のほうから仕掛けられた。「一昨年の春」(三二)、その少し前に彼は結婚し、これが「父との不和の最近の原因」となっていたのだが、父は「二人の間の不和の後の或る和ぎを作る目的」で、結婚したばかりの彼の住む京都へ一番上の妹をともなつてやつてきたのである。父からすれば二人の結婚を認め、なおかついっしょに「奈良大阪を歩く」ことで、彼らを許し、損われた親子の関係を修復することを企図していたのであろうが、彼はこれを拒絶し、結局父を激怒させてしまう。

ここで注目すべきは、〈和解〉への物語の起点がこの「一昨年の春」に置かれていることである。語り手・彼は、結果はどうあれ、父の側にも〈和解〉の意志があったことを確認したところから物語を始めているのである。

そのことから半年余り後、祖母の見舞いに訪れた父の家で、彼は、突然父から「この家への出入り」禁止を宣告される(三三)。その前の半年ほどの間、彼ら夫婦は京都から鎌倉を経て上州赤城山に行き、そこで四か月ほど

暮らした後、今の我孫子に落ち着いたのであるが、妻の神経衰弱はほとんど直り、しかも懐妊した。すでに多くの指摘のあるように、赤城山での生活と妻の懐妊は、〈自然性〉の獲得として理解できる。こうした〈自然性〉によって彼のほうだけ「京都時分と気持の変」化が生じ、父と対立する気持ちを失っていたのである。しかし、父のほうは怒りを持続していたわけで、こうした感情の行き違いによって不和はまた新たな展開を見せることになる。

以後、最初の子の死をめぐる実家とのトラブル（七）、回覧雑誌の発行（九）、第二子の誕生（十）などを経て、彼の気持ちは〈和解〉へと傾斜していく。

そして、「今から四週間程前の事」（十一）と語り出される八月「二十三日」、祖母の顎が外れるという事件が起る。そこから、物語は、急転回することになる。

彼はその日たまたま上京しており、出先から電話をすると、運よく母が出る。ここでも、彼が実家の出来事を知ることができたのは、電話を通しての母の言葉によってである。

「今はよくお寝みになつておいでなんですけど、少しお熱があるやうなの」と母が云つた。（…）

「大分ありますネ。それぢやあネ、一寸用がありますが、済まして、直ぐ行きます」と自分は云つた。「ええ」と母は答へた。自分は父が居るのだなと思つた。

祖母の病気の報に接し、すぐ駆けつけようとする彼に対して、母の返事は「ええ」とだけである。（すぐお見舞いに来てください）と言わないことで、彼は即座に父の在宅を察知する。彼と母の間に密接な心的関係が成立していることは、既に見てきたとおりである。母のサインにもかかわらず、彼は実家を訪れる。今度は「仲の口」ではなく、「玄関」（傍点付加）から入り、祖母の部屋に行く。はたしてそれが父の忌諱に触れたようだ。父は、祖母の部屋で祖母の下の始末をしている母を（女中を介して）呼びつけ、何事かを母に告げる。母は「不愉快な顔」で戻ってくる。

（母は）縁側から自分に手招きをした。自分は起つて行つた。母は小声で、

「お祖母さんもネ、此御様子ならもう心配はありませんから、今日はどうかこれで帰つて下さい。ねえ、どうか気を悪くしないで」と云つた。自分はムツとして黙つてゐた。自分は母が「此様子なら心配はない」と云つてゐる気持が理解出来なかつた。母は又、

「かう云ふ御病氣の中で若しお父さんと衝突でもするやうな事があると、それこそ、何よりの不幸になるのですから」と云つた。

「お父さんと僕との関係と、お祖母さんとの関係とは全然別なものに僕は考へてゐるんです。それはお母さんも認めて下さるでせう？」自分は少し亢奮して云つた。

「ええ、それはよく解つてゐます」

「そんならお父さんにもそれを認めて頂きませう。若し認めて下さらなくても僕をする事は同じですけれど、兎も角出来るだけ穩かにお父さんに手紙を書いて願つて見ませう」

「それが、よござんすよ。心から穩かにね」(傍点付加)

母の「不愉快な顔」に、父の彼に対する怒りの感情や意向の反映を見ることは、(読者にとつて)容易である。したがつて母の、「此様子なら心配はない」という言説も、彼を帰させるための單なる口実にすぎない。にもかかわらず、彼にはそれが「理解出来なかつた」という(むろん語り手・彼には理解できていたはずである)。いずれにしても、ここには、母が夫(父)の意向の單なる伝達者ではなく、夫を立て、義理の息子も立てようとして腐心しているさまが見えてくる。

彼のほうは、「少し亢奮」して自分と祖母との関係は父とのそれとは別なものであることを主張する。この主張には、祖母は父にとって母であるから、孫(彼)に会いたいという彼女の意向を無下に拒絶することはできないはずだという計算が働いている。いわば父の弱点をついた論理と言える。その意味でここには、祖母との関係を強調することで、父との対立を一家内の諸人間関係の一部分に過ぎないものとして矮小化しようとする彼の意図が、あらわに示されている。

とはいえ一家の統率者（家長）である父としては、その論理は彼の手前勝手な理屈であつて、とうてい認めるわけにはいかないだろう。先に見たように、父が二年ほど前に彼に申し渡したのは、「出入り」禁止、つまり（家）からの追放である。母にはそのことがよく分かつている。「それはよく解つてあます」という発言は、（私には分かつている。でも、夫（父）はどうか）という含みを残したものだらう。

読みが微妙なのは、「そんならお父さんにもそれを認めて頂きませう」という彼の発言である。彼が母の言説に込められたニュアンス（隠された意味）を感じとっていないとは思われない。分かりながらも、「亢奮」の余勢を駆つて母の言説の表面的な意味（自分の主張を母が賛同したという）に即応する。そして今まで避けてきた父との接触（ここでは手紙を書くことであるが）を、ついに、自ら言い出すのである。これが（和解）への糸口となつたことは言うまでもない。しかし、見方をかえれば、彼はそうするべく誘ひ出されたのである。むしろ、それが母の誘導によつてであることは、もはや言うまでもない。

母は即座に賛成する。そして「心から穩かにね」という注文を付ける。このあとも、「兄さんの気持も落ち着いた時に穩かに手紙で書いて上げて下さい」、「お父さんに上げる手紙も理屈は云はないで、出来るだけ穩かにネ」（傍点付加）と「穩か」を三度もくりかえし、強調する。

4

父への手紙に、「自分は母に云はれる迄もなく、理屈を（…）書く気はしなかつた」（十二）という。「母に云はれる迄もなく」というが、彼の主張が「理屈」であることは見てきたとおりである。したがつて、「理屈」を書かないということは、彼が母の気持を受けとめ、自身の考えを組み替えることを意図していると言つていい。しかし、この作業はうまくいかない。「比較的穩かな顔をした父を頭に浮べながら」書こうとするが、書いていくうちに、「父の顔は段々變つて行く」。書くことによつて、彼のうちに過去の感情がよみがえつてきたのである。このことは、じつは、彼が作家として父と自身とをモデルにした小説「空想家」・「夢想家」を書こうと励ん

でいることと無関係ではない。彼が小説を書くこととするのは、不和の感情の再生産につながり、それが現実世界での〈和解〉を抑制しつづけたと言える。したがって、〈和解〉への道は、〈書くこと〉をやめればいいことになる。彼が「会つた上の成行きに任せる」方法、〈話すこと〉を選んだのは、すでにこのとき、〈和解〉の方向に一步踏み出したことを意味している。

こうして、問題の八月三十一日を迎える。

この日は、実母の二十三回の祥月命日であり、墓参に上京することが予定されている。そのさい、「若し父が自家にゐたら会はう」と決心する。

実家に着くと、玄関からは入らず「仲の口」に廻る。こそこそしなくても許されそうだが、やはり、父を慮ったのである。鎌倉の叔父も来ており、いつもよりいい着物を着た妹たちもひかえている。一家中が特別な日という意識を抱いているようである。

なかでも、母は「少し落ちつかない様子」である。母が、あることを胸に秘め、その実行の機会を狙っているらしいことは、彼にも分かる。そこで、母から、「兄さん一寸お仏様にお線香を上げて来ませんか」と促されると、すぐに座を立つ。母も後をついてくる。

自分は線香を立ててお辞儀をした。

「お父さんお家ですね？」と自分は側に坐つてゐる母にいつた。

「ええ、おいでです」

「手紙だと気持が中々現はれないので、矢張り直接お会ひした方がいいと思つたのです」

「そりやあ、穏かにお話し出来ればそれに越した事はないのですから、どうかね、本統に穏かな心になつて、静かにお話して頂戴。私も今朝から度々今日のお仏様にどうかお手引き下さるやうにつてお願して居たの。兄さんも一時の感情で又烈しい事なんか云つたりしないで、一ト言でいいから、眼をつぶつて、これまでの事は私が悪ういたしましたとお詫して下さい。(…)

お父さんも、段々お年をお取りにはなるし、兄さん

と今のやうな関係でいらつしやるのは本統は大変お苦しいんですよ。だから一、言兄さんがさうお詫すれば、それでお父さんは満足なさるのですからね。(…)」母は眼に涙を溜めて居た。(傍点付加)

線香を上げることは母と話をするきつかけに過ぎない。母はそのきつかけを作り、彼はそれをしつかり受けとめている。まさに、彼の決心と母の思惑とがびったり息を合わせて寄りそつた緊迫した場面である。

とはいえ、母の言う父に一言詫びを入れるということと、彼が最初に言い出した手紙を書いて了解を求めるということは、大きくズレている。母はその論理的な矛盾を懇願と「涙」とで乗り越えようとしているようだ。

ここでの母は、かなり強引である。当然のことながら、彼は母の懇願を保留にする。それに対して、この引用の後でも、母は、彼が詫びることによって「お父さんお祖母さん初め、家中の者が皆晴々として、これから楽しく暮らして行ける」(傍点付加)と、「亢奮して何度も頭を下げながら」必死に懇願する。ここでは、すでに母は(内通報者)の立場から一歩踏み出し、家中の「皆」を代表して彼に(和解)を要請し、斡旋する者へと大きく変貌している。なお、ここでも「穏か」という語が二度繰り返されていることに注目しておきたい。

このような母であるならば、彼への一方的な要請ではなく、彼の詫びの相手・夫(父)のほうにも当然手を打つてあると見るのが妥当だろう。読者は、彼が父のいる書斎に入っていく場面で、そのことを確かめることができる。

書斎の戸は開いて居た。自分は机の前の椅子を此方向きにして腰掛けてゐる父の穏かな顔を見た、父は、「其椅子を……」と窓際に並べた椅子へ顔を向けながら、自分の前の床を指さした。(傍点付加)

父は、さらに叔父も呼び、同席させる。父は、彼が来るのを、わざわざ「書斎の戸」を開け、「此方向き」で待つていたのである。しかも、その顔は「穏か」だという。すでに見てきたように、「穏か」こそ、母のくりかえした特別な語である。いまそれが父の心的状態にも影響を及ぼしたらしいことがわかる。

ここまで見てくると、彼と父との(和解)の要因はいくつかあげられるとしても、実際に(和解)を仕掛けたのは母であったことが明らかとなる。母は、彼が知りえない時と所で父を説得し、(和解)を同意させ、叔父も

同席させるように手配していたのである。その意味で、この〈和解〉劇のシナリオの書き手は、家庭内をとり仕切る母であつたと言えるだろう。このようにして、一人称語りの言説の向こうに、母を主要登場人物とするもう一つの物語が、読者の前に浮かび上がってくる。

以上、〈和解〉への過程で、表立たず、しかも着実に「皆」を統率し、まとめあげた母の姿を、おそらく彼はある段階で発見したにちがいない。それが、〈和解〉を語る行為によつてはつきりと確認されることになる。小説「和解」はそのようにして成立する。冒頭部に義母像がクローズ・アップ（前景化）されたのはゆえのないことではなかつたのである。

5

「和解」の物語構造のなかで、母の存在がいかに大きかつたかということを描いてきた。おそらく、母は、家庭内を仕切る〈妻〉の理想像として彼（および語り手・彼）の眼に映つたのであらう。そのことは同時に、彼に、もう一人の〈妻〉、彼の妻を対比させることになる。

彼の妻は、どのような人物として登場するか。

八月十六日（二）、ある原稿を書き上げた彼は上京し、「身体が疲れてゐて、気分にも張りがない」いままに実家に出かけ、父と気まずい対面をしてしまう。不快な状態から、「やう／＼漕ぎつけたと云ふ気持」で自宅に戻る。妻は赤児を抱いて玄関に出迎えるが、「光りが背後から来てゐるので（…）自分の顔色がわからぬ」い。

「お父ちゃま、お帰り遊ばせ」妻は少し浮はつた調子でこんな事をいつて赤児を差しつけて、それを自分に抱かせようとした。自分は何だかむか／＼とした。黙つて座敷の次の間へ来てごろりと横になつた。浮かれた気持を不意に叩かれた妻は調子のとれない不安な顔をして、脇へ来て坐つた。（…）

妻の気持が少しもピツタリしてゐない。自分は黙つて便所へ起つて行つた。少し下痢だつた。出て来ると妻は同じ所に坐つたまま、ポカンとしてゐた。自分は其所から故と少し離れた所に妻の方を背にして又ごろ

り、横になつた。妻は赤児を傍に寝かして寄つて来た。そして自分の腰を揉まうとした。自分は黙つて其手を払ひのけた。(…)

「何を怒つていらつしやるの？」と云ふ。

「かう云ふ時お前のやうな奴と、一緒にゐるのは、独り身の時より余程不愉快だ」

暫くすると妻が泣き出した。(傍点付加)

長い引用のなかで、妻が、逆光のためによく見えなかったという最初の一瞥を除けば、ほとんど彼の顔を見ていないことに注意すべきであろう。というより、彼のほうが意識的に眼を合わせることを避けているようである。にもかかわらず、彼は、妻が彼の心身ともに不快な状態なのを推察・洞察しないことに腹を立てている。彼は自身の氣持が「ピッタリ」と妻に伝わらないもどかしさを感じ、「お前のやうな奴と一緒にゐるのは、独り身の時より余程不愉快だ」とさえ言うのである。

読者がここで彼を暴君と非難することは容易だが、物語の構造上、この第「二」は母との心的關係の緊密さを述べた冒頭部(一)と對の關係にあり、有能な母、對無能な妻という図式を提示していることのほうを重視したい。つぎの第「三」は、第「二」の出来事から想起される過去の物語である。言うまでもなく、第「二」と第「三」をつないでいるのは〈妻〉の問題なのである。

まず、すでに触れてきたように、「一昨年の春」、京都に在留中に父の誘いを拒絶したさいのこと。彼は父と会う氣になれず、一人だけ上京し、あとのことを妻に任そうと考える。

(…)未だ馴染の薄い父と妹とを良人の留守に客として受ける事は大きな重荷に違ひない。其上に妻は神経衰弱だつた。其上に妻との結婚が父との不和の最近の原因になつてゐた。妻は弱つて泣いた。自分は怒つた。怒つた儘家を出た。

精神の病的状態に加えて、自身の結婚が夫と舅との争いの一原因であることを知る妻にとって、夫不在のまま初対面の舅に会うことはつらかつたにちがいない。おそらく、彼女は泣くしか仕方がなかったのだらう。しかし、

彼はそれに対して「怒」る。怒りは妻の泣くことに向けられているのである。彼が期待する〈妻〉とは、いかなることがあっても泣かず、夫の嫌がることを進んで引き受け、見事に処理する、〈内助の功〉の發揮者ではなかったか。

もう一つ。これも触れたように、父から「出入り」を禁止されたさいのこと。それは深夜だったが、彼は妻を連れて実家を飛び出そうとする。

「何も今から出なくてもいいぢや、ありませんか」と母は涙を流しながら帯をしめようとする自分の手を握つて動かさなかつた。「今から出ても泊る所もないでせう。明日の朝早くお帰りなさい。どうかさうして下さい」といつた。

妻も一緒になつて泣声を出して何か云つた。自分は怒つて妻を突飛した。(…)

一時を過ぎた往来には人通りもなかつた。(…)

「若しお前が俺のする事に少しでも非難するやうな氣持を持てば、お前も他人だぞ」自分は突然こんな事を云つた。妻は黙つて居た。(傍点付加)

ここでも、彼は、自身の側につかない妻を「突飛し」、怒っている。このように、彼が妻に対していたらなさ・未熟さを感じていることは明らかであろう。

ところが、〈和解〉が成立した第「十四」で、「濃い霧に包まれた山奥の小さな湖水のやうな、少し氣が遠くなるやうな静かさを持つた疲労」、「長い長い不愉快な旅の後、漸く自家へ歸つて来た旅人の疲れにも似た疲れ」同じ「疲れ」ではあるが、「八月十六日」の帰宅時となんと対比的であろうか」とともに歸つてきた彼を迎えたのは、別人のやうな妻であつた。

彼が我孫子に着くと、三造が出迎えに来てゐる。電報が来て（それも母が手配したのであろう）知らされたのだという。しかも、翌日の父たちの来訪に備え、「あしたの鳥の肉も先刻鳥屋へ行つて頼んで参りました」、「掃除はもう皆すつかりして置きました。奥様が先に立つて、内も外もすつかり出来てゐます」というように、準備

万端怠りないようである。

自分は自家の坂を登らうとすると其所に妻が立つて居るのを見た。妻は黙つて近よつて来て自分の手を両手で固く握り締めた。そして、

「お目出度う」と云つた。

ここでの妻は、もはや彼をいらだたせることはしない。むしろ、「長い長い」「旅」を続けた末に〈和解〉を成し遂げ、「疲れ」果てながら「坂」を登ろうとする彼を、やさしく気づかう存在に変わっている。¹²⁾

このように見てくると、「和解」には、妻が〈妻〉となる物語が隠されていたようである。言うまでもなく、あの母のような。¹³⁾

本稿は、「志賀直哉『和解』における語り手の意識構造——〈母〉（義母）の発見——」（『国文学・解釈と鑑賞』、一九九四・四）を改稿、補筆したものであることをお断りする。前稿は枚数の関係で充分意を尽くせなかった。

注

(1) 佐々木英昭「志賀直哉における「青春」と「文学」——初期草稿への比較文学的照射」（『比較文学研究』一九八三・四）

(2) 水洞幸夫「『大津順吉』試論」（『イミタチオ』一九八七・四）

(3) つぎの「物語内容」を含め、これらの用語は花輪光・和泉涼一郎訳ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』（書肆・風の薔薇、一九八五・九）による。

(4) 須藤松雄「志賀直哉の文学」（桜楓社、一九六三・五。後、増訂新版一九七六・六の「例言」で訂正）

(5) 拙著「『和解論』」（『国文学』一九七六・三。注（13）とともに『志賀直哉の領域』所収、有精堂、一九九〇・八）

(6) 山田有策「『和解』の構造」（『一冊の講座・志賀直哉』、有精堂、一九八二・一〇）

(7) 関谷一郎「『和解』私読」（『文学』一九八七・五）

(8) 竹盛天雄「志賀直哉における父と子」（『国文学』一九七〇・六・一二）

(9) 山口直孝「『和解』の表現空間」（『日本文藝研究』一九九二・一〇）は、ここに「和解」を成立させた「書き手」

が、「この挿話を結末に向けて求心的に配置していこうとするような意図」、「端緒における書き手「自分」の過剰な物語意識」の表れ、ととらえている。本稿では「書き手」に関して触れることをしないが、冒頭部の読みに関して共通するところがある。

(10) 『電信電話事業史』（電気通信協会、一九五九・一〇）

(11) 正宗白鳥「志賀直哉と葛西善蔵」（中央公論）一九二八・三

(12) この場面が、一六世紀初頭の画家ティツィアーノの描いた「ノリ・メ・タンゲレ」の宗教画を想起させることを付記しておきたい。この絵は、復活したイエスを最初に発見したマグダラのマリヤが彼に触れようとし、「わたしにさわってはいけない」と拒絶される、「ヨハネ伝」の記述に基づいて描かれたもの。しかし、この絵には、そうした宗教的な世界を超えて、右上の山上の家、そこへと続く坂道を背景に、地面にひざまづいてイエスに手をさしのべるマリヤと、彼女を優しい眼つきで見下ろす旅人らしいイエスとの、いわば男女の親和的なさまが描かれている。「和解」はこうした絵画的の世界を取り込んで成立しているのかもしれない。

(13) かつて、「暗夜行路」の「草稿2」および「草稿5」などにおいて、家庭を円滑に運営していくための緩衝材的な役割を果たす母の存在を、当時の女子教育論者・下田歌子のつぎのような言説を紹介して関連づけたことがある（「家庭をめぐる問題」、「國語と國文学」一九八九・八）。

昔に事ある時計りではありませぬ。平時に於いても、如何に日本婦人の貞淑にして、重き社会の圧迫に堪へ、繁雑なる家庭の雑務に服し、功名を求めず、富貴をも願はず、身は単に家庭の指揮者、夫の後援者たるに甘んじて、些の野心を挿まず、忍耐忠実、貞淑、高潔なる淑徳の光は、遺憾なくこれら家庭の中に発揮して居たではありませんか。（『日本の女性』、実業之日本社、一九一三・一）

この家庭内の女性像は、本稿で言及した〈母〉・〈妻〉の場合にもなほどこか当てはまると考える。